

# 中世における甲冑の構成美についての一考察

— 工芸史における「日本のかたち」の項より —

## *A Study of Beauty of "Katchu,, in the Middle Age of Japan*

— In the history of craft in Japan —

佐 藤 武 郎

武具文化の歴史の中で、その豪華華麗な存在として識られるものに、中世武家の時代の甲冑がある。それは、奈良時代までの実戦即機能的な造形による、外来甲冑の形式や製法などの模倣から脱皮して、平安期の和様思想を受け継ぐ、日本特有の美意識に徹した、武人の晴着としての工芸的にも高度な装飾性を具備する、日本独自の甲冑にまで消化出来た時代の意欲的な作品であったからとも云えよう。そうした日本独自の甲冑形式の発達は、鎌倉時代前後—11C~14C—にかけてその頂点に達し、大鎧おおよろいと呼ばれる甲冑形式の形成の域に近づいてゆく。

「用と美の造型」の中で、水尾氏も触れているように、武具が高度な水準に達するためには「必然的にあらゆる工芸技術の参与することを要求し、金工、革工、漆工、染織工などの総合工芸品として、これまでになかった複雑な美を発揮するに至った。」と述べ、その美しさは、用と美であることは云うまでもない。と言及している。

武具の中で、とりまわ甲冑は、まさに工芸的総合の美を端的に示めした、鮮烈にして優美な武具造形そのものであると云えよう。

甲冑は古代より大陸の形式を伝える短甲・挂甲けいこうの2種があった。短甲は徒歩用として造られ、鉄板をつなぎ合わせて鉸か革紐で綴じたもの。それは古墳時代の作品で識ることが出来るが、直裁で素朴、大らかな曲線美を感じさせる造形である。挂甲は騎馬用として考案され、小札こざねと呼ぶ鉄板の短冊形の小片を使用し、革紐や組紐で左右上下に綴じ合わせて構成したもの。それは短甲にくらべて技術的にも高度なもので、実戦の場での伸縮自在な活動性の工夫がなされた。後世の甲冑形式の構造は、その挂甲によるところ多く、改良工夫を重ねて形成された

とされている。武士の勃興にともない、平安末には一応鎧としての形式を整えて、後に云う大鎧の基幹的存在となった。

この大鎧は、室町の頃より式正の鎧と呼ばれ、江戸になってからは、他の甲冑形式との分類上、本式の鎧と決められた。泰平の世では儀礼的な飾り鎧としての存在に落着くことになる。今日に伝える端午の節句の甲冑飾りは、よくその武家文化を伝承的慣習として捉えている好例であろう。

甲冑はあくまで武具のための造形であるが、中世では防禦の道具であると同時に、当時の武将の代表的被服を構成する直垂と共に、戦の場での最も重要な意義をもつ、晴着としての性格がそこにあった。身上を叩いて嗜好と趣味性に徹した直垂、甲冑を調製し、生死を賭けて出陣した武人の、悲壮なまでの心意気には感歎の他ないが、それに呼応して製作に従事した工人達の、武具に対する逞ましい創作意欲と、実戦の造形に寄せる創意工夫、それに容姿の華麗さを意図した装飾性と技術の見事な融合は、必然的に工な造形力の卓越さと、総合的造形感覚の拔群さのためである。この点は高く評価されてよいと思う。言葉を加えるとすれば、世界にその類をみない日本独自の甲冑として、総合工芸の美を尽くした造形作品にまで昇華させた工人達の、高度な美意識によるものであるといえよう。特に鎌倉期前後の、中世の甲冑形式に、日本的造形としての完璧な美しさと、武具としての逞しさを感じるのは、動乱期の戦に明け暮れた、武人と工人達に共通した人生観の反映がそこにみられるからであろうか。

西洋における中世期の甲冑は、防禦を重点的に考慮して、全身を覆い隠す形式がとられ、華美精巧な彫金、象

眼の金工による細部の装飾も、身体を包み隠す金属質の冷たい感触が、塊としての強烈な印象に押されて潜行する傾向がみられる。それは集団的戦闘での群集心理に繋がる威嚇的訴求効果に期待する構造であり、個々の場合は、豪壮さと冷厳さが、甲冑の表情として残る。それらの点から考えても、西洋中世期の甲冑は、あくまで実用と機能的本質の域を出ない造型要素が濃厚で、防禦に徹した機能美そのものだというべきであろう。このような西洋中世の甲冑の在り方と、日本中世における大鎧の構成美とは、おおよそ比較対照的である。

先に述べた甲冑形式の中で、特に大鎧は正式の鎧とされ、後世に続く形式の基本的素型として扱われて来た。

その構成は左右対照的な構造よりなっていて、兜を中心に胴と脇楯とに左右の大袖、左の胸に鳩尾の板、右の胸に栴檀の板を付け、他に籠手、脛当、貫をもって正式の揃となる。この大鎧の構成を彩る手段として、工人達は金工、革工、漆工、染織工など総合的に工芸の各分野を結集して、その製作に工人としての誇りに生き、デザインへの夢と情熱と生命を賭けて取り組んだのである。

そのことについては、鎧に付ける装飾金物の金工に携わる工人達の鍍金の技術一つ取り上げても理解出来るように、当時の「鍍」の技術は、今日行なわれている電気によるメッキ処理の技術を、遙に凌ぐ高度な水準のものだったとさえいわれ、その出来は高雅な怪しい輝きさえ放つほどのものであったとされている。その作業に携わった工人達は、作業工程で発生する猛毒なガスに当てられて、短命に終わるを充分承知の上で精根を傾けたと聴く。

大鎧の意匠で、最も装飾効果に意を用いたのは、小札を威した「威」の色目であった。草子や物語に鎧の威の色目について、その鮮麗さを称える詞がみられるが、それほどに威の色目は、華麗多彩で種類も多く変化にとんで、色彩的装飾効果と威嚇的訴求効果が大きく、観る者に鮮烈この上ない印象を与えたことが判る。

「威」は鎧を構成する小札と小札との間を繋ぐ緒通しの意味であるといわれ、それが視覚的な訴求効果としての威嚇に通じる2つの事柄から、「威」に変化したものともいわれている。威の手法に3種あって、その手法の変化によって鎧の名称が生じた。革威、糸威、綾威がそれである。革威は鎧の小札として、極めて一般的に使用されたもので、植物染料で皮革を染色し、その染めた革を細かく切って小札としたものをいう。糸威は、絹の組糸を染色して小札を綴ったものをいい、威の糸の色彩的分類からその名が生じた。綾威は、綾を細く裁って、その芯に麻を入れ、畳んで威たものを指している。

また、色糸を種々配色させて、色々威という場合もあ

り、多彩で豊富な威の種類の変化は驚異的なものである。この威の色目の変化と種類の豊富さは、中世にみる甲冑全般にいえる著るしい特色であって、奈良、平安に続く染織技術の進歩が、甲冑における構造上の、装飾面に必然的な結果として、容易に結びつき滲透していったと考えてよいだろう。当時の高度で貴族的な洗練された染織技術の蓄積がなかったとすれば、このような優美で工芸的気品に充ちた装飾性は、日本の甲冑にみられなかったであろう。

甲冑の装飾面に装飾金物がある。その用途は甲冑の構造上の要点を留める役目をしたと同時に、視覚的にはアクセントの効果と装飾上での輝きの効果をもつものであった。大鎧に附属した装飾金物は、殊に精緻を極め、その図柄も菊、竹、梅、蝶、雀など純日本的な色彩を帯びた動植物の扱が多く、単純化した形象的表現でしかも遅しく斬新な捉え方に終始している点に注目したい。そこにはすでに、貴族的趣味の見事な消化がみられ、それを身に纏おうとした武人の生活感情の中に美意識に対する造詣の深さを思い知るのである。

甲冑は身に纏う楯であるといわれる。身を防ぐ楯としての実用性の上に、武人の威容を誇示するに相応しい、甲冑のための華麗な造形を試みた、工人達の造形に対する感覚の優秀さと、一つの日本のかたちを捉えて、その美しさを追求して止まなかった、ひたむきな工人達の姿を甲冑の造形にみるのである。

## 参 考 図

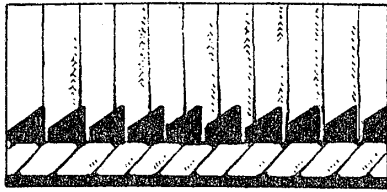
### 小札のバリエーション

小札は甲冑の主要な部分を構成する基本的な単位形によるものである。その小片を集合させて、革、糸、綾などの材料で綴じて（即ち威す意）組み立てる。小札は一般的に革を用い（他に鉄札がある）、染色して細かい短冊形にして穴をあけ、その穴と穴を威す。

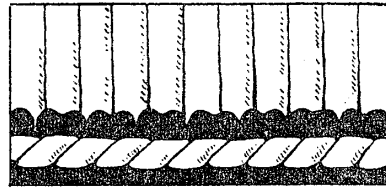
小札は図でみるように、小札頭の形状によって波流小札、分小札など名づけられた。小札は本来の機能的な面と、威の色彩的变化に対するアクセントとしての効用がみられる。威の多彩で豊富な種類に合致する、ひかえ目で単純な装飾に終始している点に、実に上手な造形的配慮が伺われ、一層威の美的効果を強調させている点が素晴らしい。小札の種類は基本的に12種あるとされ、こうした何の変てつもない小札の小片をうまく装飾的に処理している点に注目したい。小札は鎌倉期以後、その繊細さを強めきらびやかな優美なものになってゆく。

小札は甲冑における最もシンプルな造形であろう。それは機能的造形美にあふれるグッドデザインといって好い。

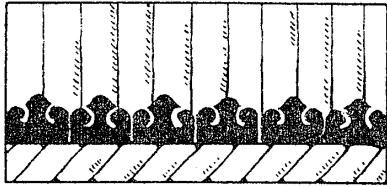
中世における甲冑の構成美についての一考察



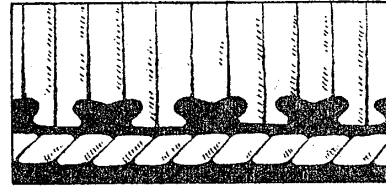
ト



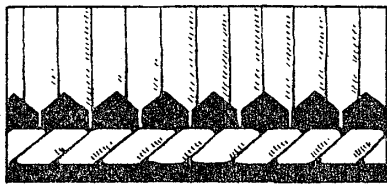
イ



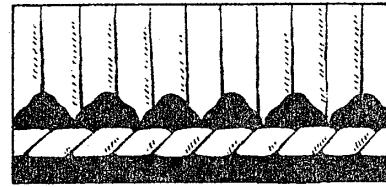
チ



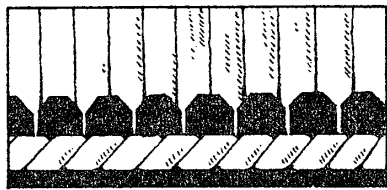
ロ



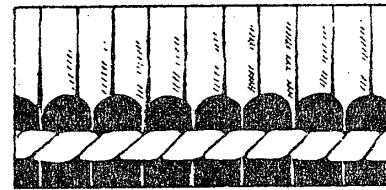
リ



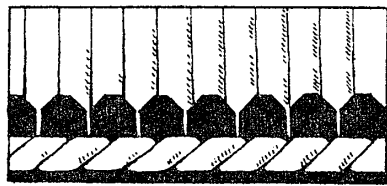
ハ



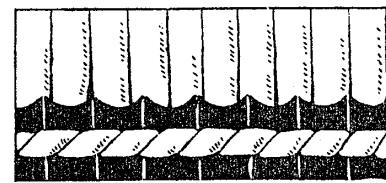
ヌ



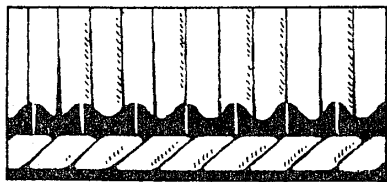
ニ



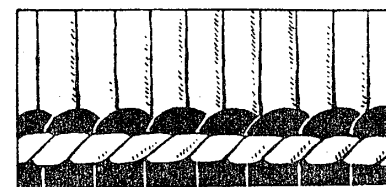
ル



ホ



ヲ



ハ

参考文献

有職故実研究 上下  
 服装と故実  
 日本衣服史  
 日本被服文化史  
 染革と印伝

石村 貞吉  
 鈴木 敬三  
 永島 信子  
 元井 能  
 辻合 喜代太郎

色彩の美学  
 日本の美術4「甲冑」  
 日本の美術「甲冑」  
 日本甲冑辞典

古今工芸図鑑「兵器編」  
 日本の工芸3「金工」

塚田 敢  
 尾崎 元春  
 尾崎 元春  
 笹間 良彦